

『宇宙人と綴じたメモリア』

折口 哲／著

講談社（2014年）



その夜、林間学校の下見のために町の裏山に来ていた朝田^{あさだ}晶人は、近くをヨタヨタと光りながら飛翔する円盤が墜落するのを目撃した。中から出てきたのは、白い半袖シャツに黒のクロップド丈のパンツを履いた佐倉^{さくら}美弥子。どこから見ても普通の人にしかな見えない彼女は、記憶を放出して失うという種族の宇宙人であった。記憶を本の形に残すという手段を探り、失ったことを受け入れて生きて行く。相当おっちょこちょいだが前向きな美弥子の生き方を見て、うらやましい、あんな風になりたいと思う晶人であった。

『短編宇宙』

集英社文庫編集部／編 加納 朋子／（他）著

集英社（2021年）

男は、見知らぬ場所で溺れながら意識を取り戻しました。何とか水から生還し、あたりの様子を探っていると、小柄な少女に出会いました。シフカと名乗った少女に、男は状況の説明を求めますが、シフカは凶暴な宇宙人—ウグルク人から逃げている最中でした。シフカの持っていた銃で、男が辛くもウグルク人を始末したところで、シフカは衝撃の事実を語ります。なんと男はあらゆる殺し屋のデータを集めてシフカが作った人工生命体だということです。混乱する男に、シフカはある人物の殺害を依頼します。（キリング・ベクトル）

『宇宙のあいさつ』

星 新一／著 和田 誠／絵 理論社（2005年）

この本には、失恋した若い女性、夜中に山を登る男性、何事にも契約が必要な時代に生きる経営者の男性などが登場するショートショートが10篇入っています。

表題作の「宇宙のあいさつ」は、壮年期の地球文明の時代に、地球人たちが植民地にできる地球以外の惑星を探す物語です。良い環境の土地があり、おとなしい住民たちが住む星を見つけ、順調に進む植民地の獲得ですが、その星にはある秘密が隠されていました。不思議な読後感のショートショートの数々をぜひお楽しみください。



『宇宙食になったサバ缶』

小坂 康之／著 別司 芳子／著

早川 世詩男／装画・挿絵 小学館（2022年）

宇宙日本食は、NASAやロシアが開発した宇宙食にプラスされる、日本が開発した宇宙食のことです。日清食品のスペースカップヌードルや、ローソンのスペースからあげクンなど、大手企業の製品が多い中、1つだけ、高校生が作ったメニューがあります。この本には、小浜^{おばま}水産高校（後に若狭^{わかさ}高校と統合）に受け継がれているサバ缶製造の技術と、「サバ缶を宇宙へ」の思いから始まった商品開発、そして宇宙食への認定まで、14年の軌跡が詰まっています。



『宇宙を回す天使、月を飛び回る怪人』

世界があこがれた空の地図』

エドワード・ブルック・ヒッチング／著

関谷 冬華／訳

日経ナショナルジオグラフィック社（2020年）

私たちは宇宙の始まりについてどんなことを知っているだろうか。それは、人類がもっとも古くから関心を抱いてきたテーマだ。世界各地の文化の根底に必ず創世神話が存在するのがその証拠で、天空を描いた地図が美しく、奇抜でもあるのは、神話と観測に基づいた発見がともに描かれているからだ。本書では博物館やコレクターが所蔵する数々の美しい図版とともに、天文学上の発見や世界各地の神話、忘れられた天空にまつわるエピソードを紹介している。

『よむプラネタリウム 秋の星空案内』

野崎 洋子／文 中西 昭雄／写真

アリス館（2016年）



秋の夜空にはどんな星が輝いているでしょうか。本書を手にも夜空を眺めてみてください。昼間の景色から始まり、夕暮れから宵の口にかけてあらわれる星座や天体が、写真と文章で紹介されています。空全体の写真から星の位置を示していくので、どこに星があるのかがわかりやすくなっています。星座解説の本ですが、わかりやすく簡潔に説明されているので学習要素は少なくなっています。また、きれいな写真がメインとなっているので眺めるだけでも満足できると思います。